「大人になれなかった弟たちに……」

八組　読んだ読んだ　第三場面

・「僕」は、弟の死を、自分がミルクを盗み飲みしてしまったから、栄養失調で死んでしまった原因の一つと思っていた。この話を読んで、戦争というものは、争っている互いの国は何の利益もなく、ただ苦しみ合うだけのものだということが分かった。この先ずっと戦争のない平和な世界でありますように……。

堀　鮎美

・ヒロユキが栄養失調で死んでしまったのは、「僕」が自分のことしか考えずにヒロユキの大切なミルクを盗み飲みしてしまったからだと思い、盗み飲みしていなかったらヒロユキはもっと栄養がとれて死なずにすんだかもしれないのにと、改めて後悔をした。

白木淳奈

・「僕」が盗み飲みしていなかったらヒロユキはまだ生きていたかもしれない。そして、十八日後には戦争は終わった。もし「僕」が盗み飲みをせず、我慢していたら、ヒロユキはまだ生きていたかもしれない。弟が栄養失調で死んでしまったことは、一生忘れられないと思ったと思う。

松波寛人

・「僕」はヒロユキが死んでしまったことを自分のせいだと責めていた。母が「ヒロユキは幸せだった」と言ったことに、「僕」を励ましていたのが分かっていたと思います。だから、「僕」は、母の思いも考えて振り返っているのだと思う。

小川留梨奈

・「僕」は、自分がヒロユキのミルクを盗み飲みしなければ、あと十八日、終戦まで生き残り、未来を作る人になっていたかもしれないという、自分を責めたい気持ちに包まれ、また「ヒロユキ」の死を悲しんだ。

梅田旬太郎

・「僕」は、弟が死んでミルクを飲んでしまったことを後悔した。そんなとき、母は「僕」を傷つけないために言葉を選んでいるところが素敵。ヒロユキのためにも生きようと思った。

安田江里奈

・泣く元気もなく、静かに死んでいったヒロユキを見た「僕」は、「僕が殺した……」「ミルクを飲まなければ」と罪悪感やいろいろな感情がこみ上げてきて頭が真っ白になっていた。B29が飛んでいたって、もうそんなのは今はどうでも言い。「僕」は絶望しているのだ。母は「ヒロユキは幸せだった」と言うが、本当は生きていてほしかったのだろう。でも、「僕」たちはそう自分の心で言い聞かせるようがんばっていた。ヒロユキの死からまもなく戦争は終わった。「僕」はなんでもっと我慢できなかったのだろうと、これまでになく後悔をした。

髙橋みなみ